

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 3 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2009～2013

課題番号：21242010

研究課題名(和文) 移民コミュニティの言語に関する総合的研究：言語接触の実態と言語政策の影響

研究課題名(英文) Immigrant Communities and Language: language contact and language policy

研究代表者

生越 直樹 (Ogoshi, Naoki)

東京大学・総合文化研究科・教授

研究者番号：90152454

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 27,300,000円、(間接経費) 8,190,000円

研究成果の概要(和文)：移民コミュニティの言語実態を調査した結果、在日コリアンでは来日時期や民族学校の種類によって言語使用状況に違いがあること、同時に共通点も多くあることが明らかになった。在独トルコ系コミュニティでは、一世か否かのほか性別も言語使用に大きな影響を与えていること、移住後数十年が経過してもなお、本国の言語と移民の言語の間には細部に亘り共通性が見られること、などが明らかになった。これらの調査結果から、「移民言語」というのは、従来考えられていた複数の言語の混合体というよりは、複数の言語の要素を保持しつつ、それらを能動的に選択するという、言語使用のありかたであることが明らかになりつつある。

研究成果の概要(英文)： One of the major findings in our research on Korean immigrant communities in Japan is that the use of language differs among the type of ethnic schools and the time of migration to Japan. Our research on Turkish immigrant communities in Germany reveals that not only generation (1st or not) but also gender effect on the use of language and that there are common features observed between the variety of the home country and that of the immigrant community after a decade of migration. Our research on Irish communities has confirmed various aspects of contact-induced language change. Based on the findings, we have concluded that immigrant language is not a complex of languages spoken in immigrant communities. Immigrant language, instead, can be referred to as a manner of the language use, in which speakers retain linguistic features of given languages and make active choices of the features.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：移民言語 言語接触 言語政策 移民コミュニティ バイリンガル

## 1. 研究開始当初の背景

地球規模での人口移動は、いわゆるグローバル化の影響で、近年一段と活発化している。Appaudurai, A. (1996) *Modernity at large* は、このような大量人口移動をグローバル・エスノスケープと呼んだ。日本もまたグローバル・エスノスケープの流れの中にあり、外国からの移住者が急増していることは周知の事実である。このような移動により、人々は必然的に母語や移住前の生活言語とは異なる言語と出会い言語接触が起きる。言語接触をめぐるWeinreich, U. (1953) *Languages in Contact* 以来、さまざまな研究が行われてきたが、この分野は上述の現状を反映し、前世紀末からとみに盛んになっている。このことは、Chambers, J. K., P. Trudgill and N. Schilling-Estes (2002) *Handbook of Language Variation and Change* が「方法論」、「言語と社会」等と並んで「接触」に1セクションを割り当て、言語接触に関する包括的なレビューを数編採録していることから明瞭である。

このような潮流の中で、本研究課題のメンバーのうち3名(日比谷・林・生越)は2004年度から2006年度に科学研究費基盤研究(B)(『移民コミュニティの言語の社会言語学的研究』)の助成を受け、国内外の複数の地域でデータを収集・分析した。その研究成果は、学会や国際シンポジウムなどで報告されている。これまでの研究を通して、在日コリアンとドイツのトルコ系移民の言語に共通の特徴が見られるなど、新たな知見が得られたが、各コミュニティの言語状況についてさらにデータが必要であること、結果データと言語政策との関連性について分析が必要であることから、さらにマー八、平高(2010年から嶋田)をメンバーに加え、本研究課題に着手した。

## 2. 研究の目的

- (1)世界各地の移民コミュニティで収集したデータを分析し、その結果を比較することにより、移民言語に見られる普遍的な特徴と個別的な特徴を明らかにする。
- (2)データ分析の結果とその背景にある各国の言語政策との関連性を探ることにより、移住と言語をめぐる諸問題を包括的に検討し、言語接触の社会言語学的諸相を明らかにする。

## 3. 研究の方法

- (1)フィールド調査によるデータ収集  
全般的な言語使用状況と使用意識を把握するためのアンケート調査、談話データ収集と詳細な使用状況、使用意識を把握するためのインタビュー調査、参与観察によ

ってデータ収集を行う。データ収集を行う移民コミュニティ、および調査担当者は以下の通りである。

- 日本のコリアンコミュニティ(生越)
- ドイツのトルコ系コミュニティ(林、平高)
- カナダの日系コミュニティ(日比谷)
- アイルランド・イングランドの移民コミュニティ(マー八、嶋田)

### (2)言語政策資料等の収集

フィールド調査の対象となる地域の言語政策に関する資料を収集する。特に、言語とアイデンティティーの関係について、ヨーロッパにおける関係資料を収集する。

### (3)公開の研究会と研究打ち合わせ会議の開催

当該分野で業績をあげている研究者を招いて、研究会「移民コミュニティ言語研究会」(のちに「東京移民言語フォーラム」と改称)を開催する。また、研究代表者・分担者が集まり、研究の進展状況と意見交換のための会議を行う。

## 4. 研究成果

### (1)フィールド調査等によるデータ収集とその分析

移民コミュニティの言語の実態を把握するため、在日コリアン、在独トルコ系コミュニティ、在カナダの日系コミュニティ、さらに在外日本人コミュニティやアイルランド英語の話者などを対象として、詳細な言語構造と言語使用のデータを収集した。

日本

- ・在日コリアンの言語使用について、朝鮮学校での授業参与観察とアンケート調査、韓国学校でのアンケート調査を行い、データを収集した。データを分析した結果、朝鮮学校の生徒の場合、学校ではほとんど朝鮮語であるのに対し、家庭では日本語がほとんどであるなど、ドメインによって朝鮮語の使用割合がかなり変化するのに対し、韓国学校の生徒は、ドメインによる変化が少ないことなど、通学する学校の種類によって言語使用状況に差があることが明らかになった。同時に、来日時期や学校の種類の違いにもかかわらず、目上の人には朝鮮語を多く使用することなど、多くの共通点も見いだされた。また、言語習得の面では、朝鮮学校の初等1年生は、自分の言いたいことを言う場合に日本語を多用するのに対し、2年生になると、朝鮮語で言えるようになることが確認できた。
- ・日本のベトナム系移民について、神奈川県大和市、横浜市において、談話データ収集を行った。
- ドイツ
- ・ドイツのトルコ系コミュニティについて、ベルリンでのアンケート調査、談話データ

収集・文字化などを行い、特に、モノリンガルとバイリンガルのトルコ語話者の間の、トルコ語指示詞の用法の違いを明らかにした。

- ・ドイツ語習得の観点から、ベルリンの日本語母語話者のドイツ語談話を収集し、トルコ語・イタリア語など他の言語を母語とする移民との比較対象を行った結果、本格的なドイツ語学習を行っていないにもかかわらず、かなり高度なレベルのドイツ語を駆使している話者が少なくないことなど、彼らの特徴について探ることができた。
- ・ドイツの社会統合政策で重要な位置を占めている統合コースの最近の動きをとらえるため、統合コースの実施機関や学校を訪問し、移民やその子弟に対するドイツ語教育の実態を調査した。

アイルランド

- ・アイルランド・イングランドの移民コミュニティに関して、アイルランド南西部で言語使用およびアイルランド英語に関するフィールド調査を行い、とくに当該言語とクレオールとの連続性について考察をまとめた。クレオールや言語交替変種など他の接触言語との比較によって、移民言語の性質を接触現象とコミュニティ環境の面から検討し、研究発表を行った。
- ・アイルランドにおける母語意識について、現地の高校で母語の定義、それに対する意識に関する調査を行った。さらに、比較のために東京の大学において同様の調査を行い、その結果を分析した。

カナダ

- ・日系カナダ人の言語に関して収集した自然談話資料の再分析を行い、ヴァンクーヴァー、トロントなどのコミュニティにおける日本語・英語の言語接触とそれによる言語変容の諸相を、同地域の他の移民コミュニティ(中国系、イタリア系等)の状況と比較しつつ、明らかにした。

#### (2) 言語政策資料等の収集・分析

特に、ヨーロッパにおける言語政策資料を収集し、言語教育や言語意識との関係を分析した。

- ・国家・コミュニティにおける英語の機能と言語政策における英語の位置づけに関する文献・資料を収集した。
- ・言語とアイデンティティーの関係について、ヨーロッパにおける「母語」「母国語」「多言語/多文化主義」という概念に関する言語意識調査の結果や歴史的文献(文学、精神分析論、哲学など)の収集・分析を行い、その成果を論文として発表した。

#### (3) 研究会の開催と研究打ち合わせ

本研究課題で得られた成果を発表したり、や関係する分野の研究者を招いて意見交換を行うために、研究会および国際シンポジウムを開催した。

- ・2011年5月にカナダからJames Walker氏とNaomi Nagy氏を招聘し、本研究課題のメ

ンバーも加わって、第1回の国際シンポジウムを開催した。2012年2月には、ドイツからMartina Rost-Roth氏とBernt Ahrenholz氏を招聘し、本研究課題のメンバーとともに、第2回国際シンポジウムを開催した。

- ・従来から行ってきた研究会「移民コミュニティ言語研究会」を発展改称し、2010年に「東京移民言語フォーラム」を発足させ、合わせて13回の研究会を開催した。この研究会での発表がその後の国際学会での発表や、学会誌論文の執筆につながったケースも多々あり、大学院生など若手研究者の育成の場にもなった。
- ・2010年、2011年、2014年の3度にわたり、「在日コリアンの言語」に関するワークショップ、研究会を開催し、研究成果に関する討論を行うとともに、研究者のネットワーク構築に努めた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計24件)

生越直樹、在日コリアン生徒の属性と使用言語の関係 —韓国学校でのアンケート調査をもとにして—、社会言語科学、査読有、17-1、2014年9月刊行予定

Hayasi, Tooru, Temporal characteristics of the Turkish demonstrative *şu*, In: Nurettin Demir, Birsal Karakoç, and Astrid Menz (eds.) *Turcology and linguistics*. Ankara: Hacettepe Universitesi, 査読無, 2014, 209-218.

林徹・安達真弓・神庭真理子、レゴ組み立て課題を通して見る日本語の指示詞コトソ、東京大学言語学論集、査読有、34、2013、275-289

平高史也、第7章日本語教育、多言語社会日本 その現状と課題(多言語化現象研究会編、三元社)、査読無、2013、106-118

平高史也、ウエルフェア・リングイスティクスから見た言語教育、社会言語科学、査読有、16-1、6-21

Shimada, Tamami, Diffusion vs. independent emergence of the *do be* habitual: Exploring linguistic connections between Ireland and the eastern Caribbean, In: Faraclas, N., R. Severing, C. Weijer, E. Echteld, and M. Hinds-Layne(eds.) *Transcultural roots uprising: The rhizomatic languages, literatures and cultures of the Caribbean*. Willemstad: University of Curaçao and Fundashon pa Planifikashon di Idioma, 査読有、2013、221-240.

Shimada, Tamami, Non-use, no identity? : The assessment of the 'non-use' judgement in 'Irish markers' in

Hiberno-English, ケルティック・フォーラム, 16, 査読有, 2013, 12-23  
Shimada, Tamami. The *do be* form in southwest Hiberno-English and its linguistic enquiries, 東京大学言語学論集, 33, 査読無, 2013, 255-271  
生越直樹, 言語行動の日韓対照研究 その成果と問題点、韓国語教育講座第2巻(くろしお出版)、査読無、2012、571-586  
Hayasi, Tooru. Foreign and indigenous properties in the vocabulary of Eynu, a secret language spoken in the south of Taklamakan, In: Lars Johanson and Martine Robbeets (eds.) *Copies versus cognates in bound morphology*, Leiden: Brill, 査読有, 2012, 423-437  
生越直樹, 在日コリアンにおけるニューカマーの子供たちの言語使用 - 東京の民族学校でのアンケート調査から -, 日本研究(韓国外国語大学校日本研究所), 査読有、50、2011、123-139  
平高史也, 『第2言語』から見たドイツと日本の言語意識 - 移民に対する言語教育を中心に、言語意識と社会 ドイツの視点・日本の視点(三元社), 査読無、2011、113-136  
Maher, John. Nicknames: Identity and Social Management. *Educational Studies*, 査読有, No.53, 2011, 117-124  
嶋田珠巳, 方言のコミュニケーションとアイデンティティ - アイルランドの英語とともに考える -, 遠い方言、近い方言 山形から世界まで(山形大学出版会), 査読無、2012、46-56  
Maher, John. "I'm Deaf. This is Sign. Get Used to It." Sign Language in Japan: The Vision and the Struggle., *Civic Engagement in Contemporary Japan: Established and Emerging Repertoires. Nonprofit and Civil Society*, Amsterdam. 査読無, 2010, 139-152  
Maher, John. Metrolanguages and Metroethnicities., *The Handbook of Language and Globalization*. Oxford, UK. 査読無, 2010, 575-591  
Maher, John. The Ten Languages of Japan. *Linguapax Asia: A Retrospective Edition of Language and Human Rights Issues*. Linguapax Asia. Tokyo, 査読有, 2010, 53-63  
日比谷潤子, 高木千恵、日系カナダ人の日本語、日本語学、査読無(依頼論文)、29-6、2010、18-27  
Shimada, Tamami. What grammatical features are more marked in Hiberno-English? : A survey of speakers' awareness and its primary details, 『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』7, 査読有, 2010, 1-25.

- 嶋田珠巳, 言語意識の問題～アイルランド英語の“Irishness”と“Bad Grammar”～、東京大学言語学論集、査読有、30、2010、215-231
- ②① 生越直樹, 日本語と韓国語の対照研究 - 次の一步に向けて -, 日本言語文化、査読有、14、2009、5-16
- ②② 林 徹, トルコ語指示詞の選択における話者の判断のばらつき、東京大学言語学論集、査読有、28、2009、267-282
- ②③ Hayasi, Tooru. Nativization in the phonology of Chinese loanwords into Modern Uyghur. S. Ay et al. (eds.) *Essays on Turkish linguistics: Proceedings of the Fourteenth International Conference on Turkish Linguistics*, 2008, 査読有, 2009, 393-402
- ②④ 日比谷潤子, 言語変異・言語変化のためのデータ—社会言語学におけるコーパスの活用、月刊言語、査読無、38-12、2009、50-55

[学会発表](計18件)

Maher, John. The Everyday Life of Japanese Place-names, Oxford Brookes University, Oxford(UK), February 19, 2014

Maher, John. New Paradigms of Multilingualism and Multiculturalism in Japan, University of London, Birkbeck College, UK, February 3, 2014.

Maher, John. Sociolinguistics and Toponymy, Oriental Institute, University of Oxford, UK, January 21, 2014

Fumiya Hirataka. Was kann der DaF-Unterricht vom ungesteuerten Erwerb lernen? – Diskursanalyse von Gesprächen japanischer Deutschlernender, 2013年8月1日, IDT, Bozen(Germany).

Shimada, Tamami. Some theoretical potentialities of Hiberno-English in contact linguistics: an exploration of the *do be* habitual, *Changing English: Contact and Variation*, 10-12 June 2013, University of Helsinki, Finland.

Hayasi, Tooru. Linguistic creativity in a secret language of a minority in Xinjiang, *Colloque international: Litterature et politique dans le monde turc(招待講演)*, INALCO, Paris(France), 2012年6月14日

Hayasi, Tooru. How different is Turkish spoken in Berlin from its 'standard' variety of Istanbul?, *Second International Symposium of Tokyo Academic Forum on Immigrant Languages*, 10 February, 2012, University of Tokyo, Tokyo.

Hirataka, Fumiya. Er ist sehr schon japanisch Ramen machen. On the ist-construction in the variety of a Japanese learner of German as a second language: A preliminary report. Second International Symposium of Tokyo Academic Forum on Immigrant Languages, 10 February, 2012, University of Tokyo, Tokyo.

Shimada, Tamami and Sally Delgado. Exploring linguistic connections between Ireland and the Eastern Caribbean, 6th Eastern Caribbean Islands Cultures Conference on the Languages, Literatures and Cultures of the Eastern Caribbean, 7-12 November 2012, The University of the Virgin Islands, St Thomas(USA).

Shimada, Tamami. Hiberno-English as a Link: Is there a possible continuum between creoles and this English dialect?, Creolistics 9, 11-13 April 2012, Aarhus University, Denmark.

Shimada, Tamami. Non-use, no identity? : The assessment of the 'non-use' judgement in 'Irish markers' in Hiberno-English, First International Symposium of Tokyo Academic Forum on Immigrant Languages, 8 May, 2011, University of Tokyo, Tokyo.

Hayasi, Tooru. Variability in linguistic judgment : An analysis of a questionnaire survey data on the usage of Turkish demonstratives carried out in Istanbul and Berlin, 15th International Conference on Turkish Linguistics, 20-22, August, 2010, University of Szeged, Hungary.

Hayasi, Tooru. Indigenous and Foreign Properties in Copied Constituents, Societas Linguistica Europaea 43rd Annual Meeting, 2-5 September, 2010, Vilnius University, Lithuania.

生越直樹、結果の背景にあるもの - 日韓若者調査の再分析 -、韓・中・日3国の異文化コミュニケーションに関する普遍性と特殊性の研究 国際シンポジウム、2010年11月19日、韓国 中央大学校、韓国

Shimada, Tamami. Grammatical innovations and contact-induced restructuring in Hiberno-English, presented at Language Contact and Change - Grammatical Structure Encounters the Fluidity of Language, Norwegian University of Science and Technology, Trondheim, Norway, 22-25 September 2010.

Shimada, Tamami. Hiberno-English in the context of World Englishes, presented at World Englishes Today: A

Critical Re-evaluation of Theory, Methodology, and Pedagogy in Global Contexts (IAWE 16), 25-27 July 2010, Simon Fraser University, Vancouver.

平高史也、外国人の学習ニーズと日本語教育の現状と課題 (招待講演)、自治体国際化協会、2009年12月10日、東京  
生越直樹、日韓両語の属格助詞の用法について、第4回日韓人文社会科学学術会議、2009年8月15日、韓国(全州)

〔図書〕(計 2件)

日比谷潤子、はじめて学ぶ社会言語学：ことばのバリエーションを考える14章、ミネルヴァ書房、2012年、288ページ

林 徹、トルコ語文法ハンドブック、白水社、2013年、269ページ

〔産業財産権〕  
出願状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織  
(1)研究代表者  
生越 直樹 (Ogoshi, Naoki) 東京大学・大学院総合文化研究科・教授  
研究者番号：90152454

(2)研究分担者  
林 徹 (Hayasi, Tooru) 東京大学・人文社会系研究科・教授  
研究者番号：20173015

日比谷 潤子 (Hibiya, Junko) 国際基督教大学・教養学部・教授  
研究者番号：70199016

マーハ ジョン (Maher, John) 国際基督教大学・教養学部・教授

研究者番号：50216256

平高 史也 (Hirataka, Fumiya) 慶應義塾大  
学・総合政策学部・教授  
研究者番号：60156677

嶋田 珠巳 (Shimada, Tamami) 山形大学・  
人文学部・准教授  
研究者番号：80565383